

末東と末西の天神さん（末東・末西）

扇で招きあい

稲穂が黄金色に輝く秋になると、収穫を祝う秋祭りがにぎやかに行なわれます。あちこちの神社では神輿や太鼓台などが出て祭りを盛り上げ、それを一目見ようとたくさんの人々が集まります。

ここ末東と末西では、祭りが同じ十月十七日にあります。その時、ちよつと変わったことをしています。

末東では、神輿が太鼓台とともにお宮さんから出発し、千丈寺湖畔のお旅所で一息つきます。その場所からは、対岸の末西のお旅所がよく見えるのです。

ちよつど時を合わせて末西のお旅所にも神輿が着いていきます。すると双方の湖畔に、役付けの人が進み出ます。それぞれの手には赤い日の丸がついた扇を持っていきます。それを上げたり、下ろしたり。向こうの末西もこたえるように上げたり、下ろしたり。お互いに扇を上げたり、下げたりして、扇で招きあいをするのです。

「元気にやっつてるかあ。」

「元気だぞう。そっちはどうだあ。」

まるで扇がお話しをしているようです。

こんなことがはじまっていたいわれをお話しますと……。

実は末西と末東の神さんは、きょうだいの神さまなんです。

末西は姉神さま、末東が弟神さまになります。

末東の弟神さまは元気もんで、お祭りが好きでした。加茂から末東に行くようになった時に、

「夏も秋も祭りをして、神輿を出せ。そうしないと行かない。」

と言つてまわりを困らせました。

それで村人は、弟神さまの言うとおりに夏も秋も同じように祭りをして、神輿と太鼓台を出すことにしたのです。

姉神さまは、弟思いのやさしい神さまでした。

「元気かどうか、時々顔を見せなさいよ。」

ところが、弟神さまはお構いなくやんちゃなことをしていて出会いに行きませんでした。姉神さまが心配して、怒るように言うので、祭りの時に出会うことを約束しました。

それで末東と末西は、祭りを同じ日にして、出会うようにしたということです。姉神さまと弟神さまが出会って、

お互いが元気にやっているかどうか確かめるといふことなのです。

扇で招き合いをして、どんなことを話していたのでしょうか。

「やってきたぞう。」

「よく来たねえ。元気かい。」

「元気、元気。姉さんはどうかあ。」

「今年は天候に恵まれて、順調だったよ。」

などと、扇で話していたのかもしれないね。

七度半の使い

加茂の神さまは、末東と末西の神さまの親神さまといひます。

ある年のこと、たいそう日照りが続いて、稲も野菜も枯れそうになっていました。加茂の親神さまが、末東と末西



と、もう一人の子どもである西野上の神さまに、加茂に集まって一緒に雨乞いの祭りをしようと呼びかけました。

末西と西野上の神さまはすぐに行かれたのに、末東の神さまはなかなか行こうとしません。村人たちが二度、三度お願いに行っても、五度、六度と催促されても、行こうとしません。見かねた末西の姉神さまがたしなめたところ、やっと加茂に出かけることになりました。

そのころには、加茂からの使いが八度目の半分まで来ていたところでした。

加茂の親神さまのところに、西野上・末西・末東の三社の子神さまがそろって雨が降るようにお祭りをしたところ、たちまちのうちに大粒の雨が降りだしました。

それから雨乞いのお祭りをするときには、七度と半分の使いを受けてからでないと、末東の神さまはお出かけにならなかつたといふことです。